

# ワイマール共和国初期におけるパウル・エストライヒの 反帝国主義的・民主主義的教育学叙述

## ドイツ教科教授史研究 ( I )

愛知教育大学 哲学教室 船尾 日出志  
(昭和63年12月6日受理)

### 1. 研究方法論に関する記述

#### 1) テーマ設定の理由

あらゆる教科教授, 特に社会科学的教育教授を反差別=完全平等と反独占を核とする民主主義の精神と科学性の原則にそう仕方て構成することが求められる。いちいち論拠をあげることはしないが, 一部での反差別と国際理解の精神における科学的教科教授実践への真面目な努力にもかかわらず, 排外的民族主義と非合理性の諸要素が教科教授のなかであまりにも目立つからである。近年は技術的な解決パターンへの習得で教師としての使命をすでに崇高な仕方て果たしていると思誤る傾向もある。そこでこの小論では, ドイツワイマール共和国の時代に徹底的学校改革者同盟の指導者としてKPDからも, そして自身が黨員であったSPDの主流派からも一線を画して独自の立場で学校改革を訴えたパウル・エストライヒ ( Paul Oestreich : 1878 - 1959 ) について考察する。かれは11月革命の時代からナチスの権力奪取の時代にいたるまでの期間を含めて一貫して帝国主義に反対し, 民主主義を貫徹させる立場からの学校改革を主張した。現代のわが国の教科教授・社会科学的教育教授の徹底的民主的改革にとっても示唆的であるにちがいない。

#### 2) 先行研究について

筆者が読了しているDDRにおける先行研究はディーレのもの ( H. Diere : Rechtssozialdemokratische Schulpolitik im Dienste des deutschen Imperialismus. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1964. ) とパウルのもの ( L. Paul : Zur Arbeitserziehung im Produktionsschulplan des Bundes Entschiedener Schulreformer. in : Herausgegeben von R. Alt und W. Lemm : Monumenta Paedagogica, Bd.

XI, Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1971. ) である。<sup>1)</sup>その他にG・Uhligの研究等がある。BRDにおける先行研究についてはベームのもの ( W. Böhm : Kulturpolitik und Pädagogik Paul Oestreichs. Verlag Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn/Obb, 1973 ) とラインターゲスのもの ( B. Reintages : Paul Oestreich und der Bund Entschiedener Schulreformer. schindele-verlag rheinstetten, 2. Auflage 1977 ) がある。前者は末尾にエストライヒの著書・論文, 二次的資料のリストを掲載しており, 貴重なものである。後者はエストライヒの論文選集も編集出版しており ( Paul Oestreich : Texte und Diskussion. schindele-verlag neuburgweier, 1975 ), ここでは特にシュプラランガー ( E. Spranger ) やリット ( Th. Litt ) などのエストライヒ批判の資料も掲載しているということに貴重である。ただし, 筆者はまだ読了していない。

わが国の研究としては, 概説的なもの以外では何といても中野光他の訳による『弾力的統一学校』( 明治図書, 1980年 ) がある。そこで主に翻訳の対象になったのは1921年の論文である。また研究論文としては川口裕二のものがある。「パウル・エストライヒの教育思想」( 関東教育学会紀要第6号, 1979年10月 ), 「パウル・エストライヒと社会変革」( 1979年度立教大学教育学科研究年報 ), 「パウル・エストライヒの教育思想における人間形成と社会変革」( 教育学研究第48巻第3号, 1981年 ) 等, いずれも貴重な研究である。エストライヒの教育思想の形成経過, マルクス主義とのかかわり, 他の改革教育学諸思想との関連, あるいはシュプラランガー, リット等との論争についてもおおいに学ぶことができた。

### 3) 論述のための原則

にもかかわらず筆者のここでの作業は意義があると考える。1919年から20年というワイマール共和国初期の論文・論説を考察の対象とすること、またエストライヒの叙述を筆者の語学力・理解力の範囲内ではあるが、忠実に翻訳し、初歩的にはあるが分析していることである。基礎資料としてDDRの教育史家ケーニッヒ(H. König)とラトケ(M. Radtke)によって編集されたP. Oestreich: ENTSCHEIDENE SCHULREFORM-Schriften eines politischen Pädagogen. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1978を選んだ。30頁を超える編者による導入的解説が最初にあり、その後37編のテキストが年代順に配列されている。エストライヒには1000を超える論文・論説等があるが、編者は選ばれたテキストが「エストライヒの政策と学校政策と教育学における反帝国主義的・民主主義的態度を認識させるはずである。それらは……不朽のもの、および今日の社会主義的教育学者にとって重要なものを明確にしている」<sup>2)</sup>としている。さらに編者はエストライヒのテキストをわかりやすくするために、詳細な注釈を付けている。<sup>3)</sup>

ここでは筆者はテキストの内容を再編成的に系統化することは考えていない。むしろそれぞれの内容のエッセンスを順に提示することにする。1919年から20年までのものに限ってのことだが。当時の教科教授の具体的様子について理解できる叙述の引用を重視し、したがって特に歴史教授について述べたものは、エストライヒにとって非常に貴重な発言であり、より詳しく紹介をおこなう。宗教教育を主テーマとするテキストについては、その意義を否定するわけではないが、ここでの分析対象とならない。<sup>4)</sup>筆者の評価を含めたエストライヒ教育学にたいする各先行的研究者の評価については、ここでは意識的に考慮の外においておく。現時点ではむしろ誠実にエストライヒから学びたいからである。もちろん、提示・叙述の過程のなかで筆者の立場が多少なりとも表現されることは否定できない。

教科教授史研究にたいする筆者の方法論的意識については、機会を改めて記述したい。

## 2. 各テキストから

1) 教師の精神の変化はより重要である — プロイセン共和国初代文部大臣への書簡<sup>5)</sup>

このテキストは1919年1月26日付けのエストライヒによる当時のプロイセン共和国の2人の文部大臣のうちひとりヘーニッシュ(K. Haenisch)宛の書簡である。<sup>6)</sup>「わたしは社会主義者として社会主義者に書く。わたしはここでは私人であり、公民である」という言葉で、書簡ははじまっている。その前半はエストライヒもヘーニッシュもSPD党员であったことを意味している。ただしDDRの教育史研究によれば1914年以降ヘーニッシュは日和見主義の立場であった。後半の意味についてはエストライヒ自身によって次のように説明されている。「ギムナジウムの正教員としては、わたしは文部大臣のお耳に達するまで審級順序を守らねばならず、それゆえわたしの学校長を通してまず県学校参事会に出向かねばならなかった。そこで文書はとめおかれ、そしてその後如才ない変更指示とともに返送されてきた。しかしわたしが大臣にどうしても訴えたいとしたなら、新しい請願書は再度全行程を通過しなければならないのであった。そのようにしてよく知られているように、プロイセンでは論争諸問題についてうやむやにされるか、あるいは落着に達するまで『鎮静』されるように配慮がおこなわれているのであった。実際そうであった。わたしはまだそうであると信じている。というのはすべての古い文部省と県の学校評議員はまさしくいまだにその地位にとどまっているからである。その上、学校長も……」。ここにおいて11月革命によって実現されたSPD政権、「社会主義」権力の実態が暴露されている。「反動的ブロックの上におかれた社会主義的頂点はそのブロックを社会主義的にしていない」。さらに、エストライヒによれば当時の大学出の教員の90%は反動的で、「古い精神の奴隷であり、信奉者であり、宣伝者であり、あらゆる新しい精神の拒絶者、排撃者である」ということである。それらのことをエストライヒは1918年11月末から12月にかけてプロイセン文部大臣名(主にホフマン)で出された進歩的諸法令が、すでに12月末から1919年1月の期間にヘーニッシュの命令によって廃

止されたり、後退させられたりしていること、その背後には学校長、ギムナジウムの正教員たちの抵抗があったことを明らかにしながら、説明している。「……………すべてが昔のままである。学校協同体(Schulgemeinde)を総じて招集しないというところまで事態は進んでいるのである。多くの教師の会合において、若干のアウトサイダーの反対はあったものの、そのように決定された。いわく、両親はそのことに反対し、生徒たちはそれらを願わず、そして『会合において厳しい諸対立が存在している』。虚弱な生徒委員会(Schülerausschuß)の白い塗り薬でもって満足されている。」それどころか幾つかの学校では学校長の抗議文が生徒たちに朗読されようとしている。その際決して文部省の呼び掛けが伝達されることなしに。事態はそこまで進んでいるのだ」。

まさに事態はそこまで進んでいた。生徒共同管理の組織としての学校評議会(Schulräte)の選抜についての、ならびに生徒と教師と学校長の協働の組織としての学校協同体の創設についての法令(1918年11月27日付け)はグスタフ・ヴィネケン(Gustav Wyneken 1875-1964)によって作成されたものであった。その法令にたいする特に中等諸学校の反動的な教師と学校長の抵抗をかんがみて、ヘーニッシュは1919年12月14日付けの緩和的法令のなかで代議員(Vertrauensleute)の選抜と学校委員会の樹立を提案した。エストライヒはヘーニッシュを強く批判する。「社会主義的文部省は自分自身と社会主義的教師たちが畏敬されなくなるように、あらゆることをおこなった」。

エストライヒは学校制度の変革を求めるが、それ以上に教員の質の変革を重要視している。「教師の精神の変化はより重要である。権威体制に合議的、民主的な構成がとってかわらねばならない。当面は合議による学校長の選抜を。教師が……………自律しているときにのみ、そして終身学校長の周囲の近衛兵気質が目的を失うときにのみ、今では本当は立派な人たちがまた得ている賄賂が消失し、次第に自己責任性が、純粋に実際の労働への帰依が確立しよう。当然移行期は困難をもたらす。しかし、新しい人間は葛藤の移行時代を通してしか得れない……………今やわたしたちは、若者を目覚

めさせそして次第に獲得するというに遅れをとっている。古い安ぶどう酒が新しい革袋に満たされており、そしてそれゆえ美味ではない。あるいは良い新しいぶどう酒が古いカビの生えた革袋に注がれているが、そのぶどう酒はいったいどうなるだろうか」。

2) 民族主義的、君主主義的、反ユダヤ主義的扇動は学校から排除せよ — 論説「徹底的学校改革」<sup>7)</sup>

エストライヒを指導者とする徹底的学校改革者同盟の創立会議にはSPDの文部大臣ヘーニッシュも出席した。席上エストライヒと文部大臣の間で革命や民主的學校改革をめぐる激しい論争がおこなわれた。その後、ヘーニッシュはSPDの中央機関新聞『フォアヴェルツ(前進)』紙上で2つの弁明のための論説を発表した。ここでとりあげる論説はそれらにたいするエストライヒの反批判であり、同じく『フォアヴェルツ(前進)』紙1919年10月17日付け第531号に掲載された。

ヘーニッシュはかれの名誉ある意図がすでに実行に移されていると考えている。それにたいしてエストライヒは文部大臣の考えがどんなに楽観的すぎるかを次のように説明している。「しかしながらビスマルク・ヴィルヘルムの時代は数十年にわたって人々を型にはめ、あらゆる階層の人々をそのようにしてある志操図式にはめこみ、そして非常に入念に諸規定と諸処方のなかに埋めこんだ。そのようにしてあの時代の息子たちは、かれらの自由意志的-無意識的な英雄崇拜の屈従の制限から外に引き抜かれること、および自己責任の先鋭な空気の中に置かれることに疑いなしに反抗した。かれらは学びなおそうとせず、かれらは決して検証しようとはせず、かれらはかたくなである。古い権力、つまり貴族、軍人、学生団(Korpsstudenten)および聖職者が支配していたときには、かれらは礼儀上の義務へのいかなる『感傷』もなしに、なんらかの仕方でも共和主義的あるいは社会主義的な病気にかかっているあらゆる者はかれの職を辞せねばならないと説明した。当時、役人が社会民主党との一致について敢えて語っただけで、懲戒的審問や訓戒が『自業自得的』反応としておこなわれた」。続いて、第1次大戦中とその後の様子に

ついで次のように書かれている。「学校官庁やその他の官庁が4年間青年に不誠実と不道徳の精神を注ぎ込み、あらゆる平和主義的な、まさにあらゆる誠実な動きが無骨な暴力でもって抑圧されてしまった後、血と詐欺と虚偽の法外な大騒ぎの後、さて局面は一転してしまった。しかし、とはいうものの全ドイツ暴力人間(die alldeutschen Gewaltmenschen:ここで明らかにエストライヒは、ドイツ帝国主義のイデオロギーの普及に尽力し、多くの教師と大学教員をメンバーとしていた全ドイツ連盟をもっている。その連盟は1891年から1939年まで存続した一筆者)の誰一人として去っていないのである。かれらは当初は『服従していた』」。

確かに、かれらは当初は服従していた。しかしその後エストライヒが早くも1919年10月に「全ドイツ青年同盟や類似の諸組織を、つまりあらゆる共同体、あらゆる学校生活を転覆しようとしている扇動的な団体を学校から追放せよ。青少年が無責任な策動へと惑わされている。そのような策動は両親と教師が背後で教唆していなければ可能ではない」と書かねばならないような事態が生じた。その責任についてエストライヒはヘーニッシュと文部省を厳しく追及する。「12月と1月には紳士たちはあらゆる譲歩をおこなう用意があった(「かれらは当初は『服従していた』)」ということの言い換え一筆者)。当時一 当時は論理が保たれていた一 時代が求めるあらゆる変化を覚悟し、そして耐えようとしていた。当時は屈従時代の名称のすべて一 ホーエンツォレルン学校、ヴィクトリア・ルイーゼ・ツェツィリア学校、アウグシュテ・ヴィクトリア学校等のような名称を有する諸学校一 が時代にマッチするものにおきかえられえただろうし、無能な封建領主たちの像(フリードリッヒ大王は除く)は除去されえただろう。しかし当時は結局その必要性、その法外に重要な必要性は無為に怠られたのであった。互れきの山の上に置かれていたそれらの物は早くもすでに今や『象徴』に高められている。そしてそれらの物のために闘われうる。というのはその闘いの結果についてどのような心配もないからである。省はまさに何でも承認している。何でも承認する

ことを一 そのことを紳士たちは頼りにしているのだが一 せずにはおれないのである。というのは省はとにかく慈悲による改心を標ぼうしているからである」。

エストライヒはそのような事態を打開するために再度ヘーニッシュに要求している。その要求においてもまた当時中等諸学校での反動的なイデオロギー状況をうかがい知ることができる。「かれはもう一度徹底的に尊敬を獲得するべきである。『みせしめ』、『排除してしまうこと』、それらはわたしが従来嫌悪してきたことだが、しかしここではあからさまな反抗の多くの場合のひとつへの処罰が大切である。数千人の紳士たちは君主制の復活を待ち焦がれており、もしそのような処罰がおこなわれなければ、古い処方にしたがってあらゆる共和主義者と社会主義者が殴り殺され、切り殺されるのが見られよう。わたしたちはただちに、反動派がわたしたちの主人とならないように注意しよう。あらゆる共同市民の信念は尊重されるが、しかし民族主義的、君主主義的、反ユダヤ主義的扇動は学校から排除せよ。あらゆる学校長が大講堂での集会で暗に陽に青年に『恐怖の現代』から輝く君主制の時代を振り返るのを求めることは、徹底的に中止されねばならない。数十年にわたって学校は左派に反対するあからさまな党派的道具であった。今わたしたちはそうでなくなことを要求する。旧秩序の勤勉な働き手たちはひどい扱いを受けていないはずだ。誰かがかれらに何かをしたのか」。

エストライヒは右派SPDの文部大臣を批判し、要求するのみではない。「さらに、過ぎ去った統治体制の用益者や夢想家には言葉では確信させられない。かれらは逆行への希望が幻影であるという事実は厳粛なことであることに気づかねばならない。かれらは、低劣な経済政策のせいで廃虚を引き受けた人々が命を賭けて、新しい生活を築こうとしていることを知らねばならない。そうすれば完全に被教育可能性を失っているわけでない者たちは、次第に正しい道を見いだすだろうし、そのようにしてかれらの小舟を新しい国家の船に引かせるように敢えてするようになるであろう。わたしたちは躊躇することなく清掃作業と建設作業

をおこなう確信的で、誠実で、恐れを知らない加担者、新しいものへの加担者を必要としている」、と徹底的学校改革者への結集を呼びかけ、そして加担者を求める作業について同盟員に次のように訴えている。

「わたしたち徹底的学校改革者同盟内のアカデミカー（ここでは、総合大学出身者を意味する。創立時の同盟には総合大学を卒業した中等諸学校の教員しか参加していなかった。その後、1919/20年の諸論争を通して、エストライヒとかれの仲間たちは学校制度の民主的変革は人民のあらゆる民主的諸勢力の結集を前提としていることを認識したのである — 筆者）は — わたしたちの部隊は雪崩のように増大してきている — その作業を、わたしたちができる範囲で最大に、まだ救われるべき範囲で最大に実行したい。というのは大切な時だから。わたしたちはわたしたちの新しい全国同盟において、すべての離散していた改革者たちを、性別に関係なしに、アカデミカーのもとに結集させたい。それは偏狭なセクト化作業のためではなく、次の理由による。つまり今後もまた人民に指導者を提供し続けるであろう『中等』諸学校は、その砦の占拠部隊が、突撃してくる革命家たちに好意を持つ場合にのみ人民に開かれうるという。わたしたちは皆、おのおのが自分の地位で、自分の党で、すべての学校改革者たちと隊伍を組んでおり、わたしたちは皆共和主義者で、そして民主主義者であり、多くは社会主義者である。わたしたちは、情熱的に真の人民共同体を熱望する精神の革命家であることを欲し、わたしたちは攻撃を受けることのないように、生活のなかでの模範者を志向することを義務づけられている。その義務感を喪失してしまっている者はわたしたちの隊伍に属さない。もしかれがわたしたちにとって援軍でありたいのなら、かれは2倍のことをやらねばならない。その用意のある者をわたしたちは歓迎する。そしてわたしたちとともに勝利しよう。というのは勝利は常に人民の力と未来への信頼、新しいものへの意志と信用、冒険心と信念があるところに存在するからである」。

3) 形式拘泥、官僚主義、肩書主義からの自由 — 論文「社会主義的教師」<sup>8)</sup>

この論文は雑誌『ディー・タート（行為）』の1920年第1号に発表された。

エストライヒは社会主義的教師が理性の助けをかりて社会主義的立場を貫くことを求める。「社会主義的現実には社会主義的精神によって充たされた社会主義的人間なしには生じえない。わたしたちは今やそのような人間を、その精神を欠いているのを残念に思っている……。資本主義的精神は以前よりもより劣悪な乱痴気騒ぎを礼賛している。ようやく数世代のなかでわたしたちは人類を精神的に社会主義へと教育することができる。わたしたち自身は資本主義的経済秩序の真っ只中で成長し、宗教的、社会的、政治的に資本主義の『賜物』を詰め込まれており、血と本能において資本主義的である。わたしたちは数千年にわたる教育のおかげで、生涯にわたる教育のおかげで『本性』からして資本主義的に反応する。わたしたちはあらゆる個々の場合に秩序を求めてしまいがちである。したがって理性の助けをかりて社会主義的立場を貫かねばならない」。

続けてかれはそのような立場からの陶冶・訓育作業について考えを述べる。その際、社会主義的教師自身が被教育者にとって例であるべきだとするエストライヒの要求は厳格で重みがあり、アクチュアルな意味においてはわたしたちに反省を迫り、実に教訓的である。「社会主義的教師は模範的でなければならない。つまり、有能で、義務に忠実でそして正義でなければならない。行為をかれは欲し、言葉ではない。生活は道徳的な宣言である。他者の信念はかれにとって聖なるものである。すでに未熟な子どもの魂がその権利を持っている。もし教師が子どもが家庭から持ってくる信念を軽蔑したら、その家庭の価値が低められてしまう。真の社会主義者の優位性はあらゆる従属性、あらゆる関係、あらゆる拘束とあらゆる成り立ちの理解、把握のなかで明らかになる。かれは他者の思考圏に耐え、そして尊重する。かれの強みは、世界の事象のなかに物質的、経済的、社会主義的生成を明示し、経済とイデオロギーの間の諸関連を — 精神の方向づけと経済秩序の間の諸関連を — 明らかにするという点にある」。

そのような陶冶・訓育作業を通して、社会主義

的教師は子どもたちとかれらの家庭のなかに変化をよび起こし、同時に家庭自体をも変革すると述べられている。「そのような教師のそのような教授は家庭のなかに反作用的に影響する。そのようにして社会主義的教師はかれの良き事柄への最良の宣伝家となる。もはや『ああ、なんてことだ、社会主義者だよ、いやだなあ、本当に』とは言われず、むしろ次のように言われる。『立派な人だこと。そしてかれは社会主義者よ。でも社会主義はそんなに直接的に教えられていない』」。

「『教授』学校は社会主義的教師には論理的帰結において、そこから喜ばしい生活感情の潮流が人民の周囲世界へ流れ込む訓育共同体と生活共同体へと拡大される。社会主義的教師はかれの共同体を真の、内的な、自由な道徳性への教育する。かれにはそれができる」。

エストライヒは社会主義学校での社会主義的教師像についても述べる。「社会主義学校は社会主義的教師によって形式拘泥、官僚主義、肩書主義から自由とされねばならない。教師は自己に責任を持つ完全な人間であり、ある番号を有する『教える』力でなく、『勤続年数を貯えている』が、かれの『勤務時間』について値切る教育学的小売商人ではない。そのような小売商人は、いくつかの弾丸に移された自分の知性を脱個人化された標準的生徒ヌンメル……君に数分間にわたって発射するのである。以前はそのような教育学的小売商人であった。しかし変わらねばならない。型にはめ込むことは中止されねばならない。あらゆる人をあらゆる場合に『一律に』扱うべきではない」。

エストライヒは教師にかせられた人類的課題について言及することを忘れない。「社会主義的教師は青年と人民を意識的に、かつ一貫して社会的連帯性へと教育し、そしてそれをもって人類とあらゆる個人の自意識への道を開くべきである。というも、人類がすべての個別の人間のそれぞれの人格的価値に応じた舞台と活動圏以外の他の何でありえようか、ということがあるから」。

4) わたしたちは自己責任への教育を欲する  
— 「自由全国学校会議」の開会演説<sup>9)</sup>

ワイマール共和制成立後すぐに、全国学校法の準備のために全国学校会議が実行されるべきであ

った。しかし、それは繰り返し延期され、結局1920年6月に開催されることとなった。エストライヒとかれの仲間たちは民主主義的学校改革を断固支持することを表明するために、1920年3月末から4月にかけて「自由全国学校会議」を実施した。ここで紹介・分析するテキストはエストライヒによるその会議の開会にあたっての演説である。1920年3月13日から17日にかけて、いわゆるカップ一揆が勃発したが、そのことも当然かれの演説内容に影響を与えている。

明らかにカップ一揆を意識して、エストライヒは学校改革がきわめて政治的な案件であると言う。「わたしたちが人民を自己責任へと教育しようと欲するとしたら、そのことは自由な人民国家においてのみおこなわれうるのである。それゆえわたしたち学校改革者は古い官憲国家を拒絶する。生来のそして設定された権威のもとで自己規律へと教育することは可能ではない。わたしたちは自己責任への教育を欲するゆえに、それゆえにこそわたしたちは民主主義者・共和主義者でなければならないのである。民主主義と共和制でもってしかわたしたちはわたしたちの学校改革へと、わたしたちによって志向されている人間性へと……到達しえない」。挨拶の冒頭でこのようにエストライヒをして言わしめたものは、カップ一揆の際の一部の教師と生徒たちの行状である。その点については次のように述べられている。しっかりと事態に目を向けていた者は「当時、明瞭な歓呼を民族主義的な教師と生徒たちのなかに見いだしていた。老いも若きも『内なる敵』をやっつけろと出陣した。旗がふられ、歌われ、花が飾られ、すでに君主制暴力支配が再び構築されると考えられた」。

エストライヒはここでもまたそのような事態を引きおこした責任がSPDに率いられたドイツ民主党、中央党との連合政府にもあることを言う。それにより第一次大戦中と戦後の学校教育における一定の連続性が明らかにされている。「……道徳性は諸学校において戦争の期間中官憲によって根絶やしにされた。子どもたちは行進、兵隊遊戯をやらされるか、あるいは強制され、『回収』のために家や街路に派遣され、官付や戦争借り入れ金の回収にあたるように説得され、外仕事が称

賛された。かれらはもはや、自分たち青少年が自己目的を、自己教育をと言いかえてもよかろうが、持っていることを知らなかった。かれらは手段や道具でしかなかった。陶冶作業は付随的な要件でしかなかった。大道商人気質が褒められ、平和主義的志操、実践的キリスト教が侮辱された。そのようにしてあらゆる倫理学、あらゆる純粋の労働熱中が滅ぼされた — 新しい政府には次の点で非難なされるべきである。すなわち新政府は古い体制と絶交していないこと、新政府は工業救護連盟（die technische Nothilfe：1919年から45年まで存続した、ストライキにたいする工場への専門家配置のための民間組織。ドイツ軍国主義によって指導されそして国家的に財政援助されていた — 筆者）、救急看護中隊等のブルジョアの防衛隊の諸組織が学校に入ることを許し、あるいはそれどころか勧めていること、新政府が東方防衛における勤務にたいする特別な報酬を約束していること、等々の点で」。エストライヒはここで明確に右派SPDの大臣たちがまったく頼りにならないという確信を表明し、次のように述べている。「大臣の目の不自由さと弱さをかんがみて、わたしは正しくも次の確信に達した。すなわち、わたしたち徹底的学校改革者同盟員は、わたしたち名誉ある民主主義者および名誉ある共和主義者と真の社会的精神の担い手が徹底的学校改革者同盟員なのであるが、わたしたちが理念に貢献するときには、わたしたち自身にしか頼れないという。それはかまわない。わたしたちは敢えてそうする。『今日立ち上がれない人は、永遠に失われた人であり続ける』……………」。

またこの演説のなかで学校教育と党派性の関連の問題に論及しているが、わが国で「教育の中立性」、「学校の正常化」を主張する人たちへの批判としても成り立ちうるので紹介する。「わたしたちは党派政策的でありたくないし、そしてないであろう。しかし学校、教育が成長途上にある世代の社会的志操に影響し、それゆえ政治的な道具であることを、わたしたちは意識している。それゆえ政治的総立場をもたない青少年陶冶者、学校改革者はありえない。その教授を、目標を意識していようが、あるいは無意識的であろうが、常に

陶冶政策的（つまり階級『国家維持的』）諸目的に貢献させている人々が、実は逆に、自分の意見ではない客観性をいまだに余りにも強く志向している者に、教職における党派政策的狼籍の罪をさせている。というのは、かれらは学校を自分たちの領分と見なすことに慣らされているからである。かれらは人民国家においてもまた、そして共和国憲法と『諸人民友好の精神における』教育への服務宣誓後もまたまだまだ、かれらの生徒たちを君主制と報復闘争へと養育する資格があると信じている」。

演説の最後にエストライヒはカップー揆のせいで当初予定されていた会議プログラムが変更されざるをえないこと、特に外国からの報告者たちがベルリンに近づけないことを指摘し、そして外国から学ぶことの意義を次のように述べている。「『外国における進歩』についての記述をわたしたちは、わたしたちが何か外国を偶像崇拜しているゆえに、先発させるのではない。むしろわたしたちは利用できるあらゆるものをそこから取り入れたいのである。その結果、それらをわたしたちのものにし、それをもって — わたしたちの良きものを放棄することなしに — わたしたちが理想に近づき、それをもってドイツがあらゆる立派なもの、有益なものそして美しいものの集中場所になるように。批判は家から始められねばならない」。

5) わたしたちは「民族的名誉」の物神崇拜の奴隷であるべきなのか — 論説「„Gloire”と民族の歴史<sup>10)</sup>

このテキストはドイツ社会民主主義男女教員組合機関新聞『ディー・フライエ・レーラー（自由な教師）』紙の1920年第32号に掲載された論説である。それは帝国主義的教育の手段としての民族主義的・軍国主義的歴史叙述に反対するものである。標題「„Gloire”と民族の歴史」でもって、エストライヒは、過去の侵略戦争の賛美とそれに結びつけられた名声(gloire:フランス語の訳一筆者)は、ドイツにおけるブルジョアの歴史描写が提示しようとしたように、フランス人の態度にとって典型的なものでなく、むしろそもそも軍国主義と民族主義の成分であることを表現している。エストライヒにとって貴重な歴史教授論であり、方法的にも

意義がある。

エストライヒは次のように書き出している。「大ベルリン劇場の劇評家はわたしに書いてよした。『今朝わたしがウンター・デン・リンデンを歩いていたとき、子どもたちの多くの縦隊がかれらの教師に率いられてツォイクハウス(Zeughaus: ベルリンのツォイクハウスは1695年から1706年の間に武器庫として建設され、そしてその後かなりしてから軍博物館として役立てられた。そこでは特にプロイセンの侵略戦争が礼賛された一筆者)に入っていた。貧しい子どもたちがそこで愛国主義的な誇張において何を聴かされねばならないのかは、想像しうる。そのような毒化が根本のところでおこなわれているとき、あらゆる素晴らしい仕事が何の役に立つのか』」。

エストライヒは知人の恐怖は当然だが、しかしその毒化の根本はより深刻であるとしている。「根の毒化はそのようなツォイクハウス訪問のはるか以前に始まっている。学校で。教師たちの頭脳は半世紀を通じて公的に承認されそして求められてきた次のような知恵によって満たされている。すなわち、民族の歴史と世界史の軸点は戦役と会戦にあるという。社会的な思想に通暁した教師たちにさえロールバッハ(P. Rohrbach 1869-1956, 帝国主義的侵略政策の信奉者一筆者)は、軍隊制度と軍備の発展が権力分配と文化発展にとって決定的であるということを確認させている。政策についての種族敵視的見解と王侯権力的見解は、それらは民族的財産強奪の素朴な觀念論的実利主義(idealistisch Materialismus)と関連して諸人民に植え付けられてきたものだが、今なおすべての図書や教室を通じて多かれ少かれかなりの残存物のなかに幽霊のように出現している。それはわが国においてのみではないが。わが国の文化、わが国の詩、音楽、建築等は戦争の響(Ton)と価値によって完全に織りこまれている」。

しかしエストライヒはだからといって「わが国の文化、わが国の詩、音楽、建築等」を排除すべきであるとは考えない。「というのは、わたしたちは愚か者でも、俗物でもないからである。わたしたちは逆に生成を社会学的教授のなかでまさに明確にし、それを客観的に根拠づけ、過去の時代

の『諸詩歌』をそれらの発展的諸価値(忠誠、郷土感情等)において公正に扱い、しかしそれらの虚偽性(階級諸権力の支配手段としての感情)は発見したい。わたしたちは、そこにおいて詩人や芸術家がかれらの時代の伝統的感情スケールを個人的見解のなかに翻訳した過去のすべての文学、英雄彫塑等を否定することはできない。わたしたちにそれができるときでさえ、わたしたちは実行しない。というのは人類は事実やその過去の知識なしには易々と縮んでしまい、自己もその道筋とその課題も把握することはないだろうからである」。

エストライヒの論理は明確である。反動的な作品をその反動性のゆえに単純に否定したり、排除したりすることは認めず、むしろその公正な扱い方を求めるのである。巧みな比喩をまじえながら、エストライヒは同じ論理をさらに展開する。「しかし、わたしたちは……わたしたちの時代において引き続き„gloire“の、つまり誤って解釈された『民族的名誉』の物神崇拜の奴隷であるべきなのか。トライトシュケ、シェーファー、レーテ(H. v. Treitschke: 1834-1896, D. Schaefer: 1845-1929, G. Roethe: 1859-1926, いずれも反動的なプロイセン・ドイツ歴史叙述の主要代表者であった一筆者)の学校出身の目の不自由な神ヘドゥアー(Hödur)、かれは引き続き前史時代のフィンガルのハーブの弦に向かい、そしてかれの人民をしてメシアの根絶会戦をおこなわせるべく演奏し、感激させ、かつかたくなにさせている。わたしたちはそのことを嘲笑すべきでなくむしろ一わかりやすい、論理的な一意識的に悪用されているのではないすべての過去の価値の繊細な愛護のもとで、大々的に啓蒙するべきである。というのは結局わたしたちの周囲世界のあらゆる現象はすでに『過去の叙述』だからである。わたしたちは記念碑や建物、会戦場等を、あらゆる構成形態におけるそれらの詩歌とともに存在させ続けうるし、存在させ続けねばならない。しかしわたしたちはその世界を、街路でそして『コレクション』において……巡り歩くことを学ばねばならない。人民史・諸人民博物館を学ばねばならないと同様に。大量的和解(Massenvertrag)を通して、強い表現や悪罵なしに、次々にますます



より広範囲の人々に次のことを賛成させることは可能であるにちがいない。すなわち、『武功』や『王候的人格』についてまったく省略されるべきでない — それらは正しく編入されるべきであるだけであり、そしてそれらの像は効果的人民把握へと豊富化されかつ深められるべきである — 自己の人民の歴史を回顧すること、つまり非常に変化に富み、さまざまな側面をもち、種々の状況によって規定され、常に未来への芽を内包しているが、しかしこの間に時代遅れとなっている生活の先行世界を回顧することを。理解せよ。その理解……から、して過去のシンボルを物神としてかれらの階級利害の擁護において悪用している者たちにたいするますますより強い闘う怒りと闘う意志を生み出すために」。

過去のシンボルを物神として自己の階級的利害のために利用している者たちにたいする闘争意志を生み出す力量を、自分たちが持っていることをエストライヒは主張する。「わたしたちの武器と見解は非常に良く、非常に科学的、明確かつ把握しやすく、過ぎ去ったものについてのあらゆる詩歌と評価を明瞭に正当にとり扱う余地をおおいに与えているので、わたしたちは……まさに、そこにおいてはまだ悲しむべき無知が支配的である知識人諸階層と対決することを繰り返し試みなければならぬ。まさにわたしたちの最良の者たちは、『民族史』を辻説法家として普及させ、老練にかつ魅力的に古い英雄詩歌をより広範な歴史詩歌と人類詩歌に接合させるのに十分優れている」。もしそのことに成功しないならば、どのように不幸な事態が引き起こされるかをエストライヒは続けて説く。「過去の記念碑を現在の宣言と未来の道しるべとしてのその今の誤った場所から、わたしたちの由来の証人の名誉ある位置へおきかえることに成功しないならば、わたしたちとわたしたちの青少年の血があらゆるツォイクハウスにおいて、そしてあらゆる記念碑において流れる。何も『根絶させる』ことはないが、名誉心をもって評価を変えよ。その道だけが進むのである」。

ここで エストライヒはツォイクハウス訪問話を戻す。基本的にはここまで展開されている論理と同様であるが、最後に社会主義者としてイ

デオロギー的・文化的側面への尽力の仕方が弱かったことを反省している。「今のところ『ツォイクハウス』におけるクラスでのほぼあらゆる訪問は民族主義的な意味における毒化を意味するであろう。もし教師たちが、まさにかれらの人民とかれらの生徒たちへの燃えるような愛情から、かれらの課題と歴史の意味を正しく理解しているのならば、そのような訪問は必要ないであろう。しかし長い砲列等のところでおおいに省略がおこなわれ、写真や『個人的に』歴史的に興味もたれている『戦利品』で満足されるなら、その場合は確かに危険は僅かであろう。子どもの頭のなかでもまた、その殺人武器見学を生き生きとした生成の証拠とし、そして — それ以上にすすんで指導するためには、ある正当な思考が必要とされる。その……素晴らしい建築物（ツォイクハウスはベルリンの最も重要な建造記念物のひとつである — 筆者）はその内容と同様にほとんど民族主義的扇動のために鼓舞を与える必要がない。その精神は音響と色彩と眺望を規定している。その精神が、古くさい偶像 — „glorie”；支配と略奪の試み — を青少年の指導理念であると宣告するために、学校と博物館で今なお過去のドキュメントをあてにし、そして利用しているということに、わたしたち社会主義者もまったく共同責任がないとはいえないというのは確かである。おおいに怠られている。わたしたちは『誇張』や『根の毒化』にはほとんど注意していなかった。わたしたちはあまりにも専ら経済的に考えていた。 — 現代的に言うと、その瞬間においてはしばしば最も重大な『不可測的なもの』は不可測的にしか、つまり精神的な技術によってしか、そのエーテルがわたしたちのために吹くように変えられえない」。

### 3. 今後の研究・成果叙述に関する記述

①この小論はドイツ教科教授史研究としてはもちろん、エストライヒ研究としても入り口の段階のものである。したがって、この小論はそれ自体として完結したものではない。当面、引き続きケーニヒとラトケの編集に掲載された諸論文を読み続けたい。さらに他の一次・二次資料、他の徹底的学校改革者同盟のメンバーたちの理論と実践にも目を向けたいものである。

②DDRで最近、改革教育学運動について新しい評価と検討がおこなわれているが<sup>11)</sup>、改革教育学運動の理論と実践、ドイツ労働運動の教科政策と教科方法学の大枠のなかでしかエストライヒも位置づけられないと考える。

③エストライヒの教育思想と教育理論の発展、それにたいする評価はしたがって筆者の研究の進展の過程のなかでおこなわれる。

④エストライヒの文章の難解さについては、ケーニヒとラトケが「それらの矛盾はさらに同じく……極めて自分勝手な表現様式によって、そしてかれ自身によって生み出され、しばしば明瞭には定義されていない学校政策的・教育学的諸概念によって強化されている」<sup>12)</sup>と一定批判的に指摘している。筆者の限られた理解力と語学力のゆえに、誤解や誤訳がありうると考えるが、そのことも含めて種々のご批判をいただければ、幸甚である。

#### 注

1) ディーレのものは筆者は卒業論文の作業のなかで取り組んだ。「ワイマール初期、プロイセンにおける歴史＝公民教授の分析」大阪教育大学社会科学教育教室提出 1973年

2) H. König/M. Radtke: P. Oestreich: EN-TSCHIEDENE SCHULREFORM - Schriften eines politischen Pädagogen. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1978, S. 43

3) 注釈だけで196項目、20頁以上にもなる。またエストライヒのテキストについて正書法上の変更がおこなわれているということである。

4) 筆者は以前にその問題に取り組んだことがある。共著「『ドイツ自由学校協会同盟』の教育学的教科グループ - ワイマール共和国における世俗的学校運動の研究 - 」大阪教育大学紀要第24巻 第V部門 第1号 1975年

5) P. Oestreich: Ein Schreiben an den ersten Kultusminister der republikanischen Preußen. in: H. König/M. Radtke: A. a. O., S. 43-45.

6) もうひとりの文部大臣はアドルフ・ホフマン (Adolph Hoffmann 1858-1930) である。かれ

はUSPD左派に属する党员であった。

7) P. Oestreich: Entschiedene Schulreform: in: H. König/M. Radtke: A. a. O. 50-54.

8) P. Oestreich: Der sozialistische Lehrer. in: H. König/M. Radtke: A. a. O., S. 55-56.

9) P. Oestreich: Rede zur Eröffnung der "freien Reichsschulkonferenz" des Bundes Entschiedener Schulreformer. in: H. König/M. Radtke: A. a. O., S. 57-60.

10) P. Oestreich: "Gloire" und nationale Geschichte: in: H. König/M. Radtke: A. a. O., S. 60-62.

11) K.-H. Günther/Ch. Uhlig: Zur Rezeption der Reformpädagogik durch die Pädagogik der Deutschen Demokratischen Republik. in: Pädagogik, Heft 9/1988, S. 718ff.

12) H. König/M. Radtke: A. a. O., S. 28